

評価の過程を経ることにより、他の患者に留置針の固定を行う場合にも活用できる知識、つまり「ルール」に関する知識が習得されることが確認された。

結 論

以上の結果より、文献検討を中心とした学習に問題解決過程を取り入れる学習は、学生の問題解決能力の向上に効果のあることが確認された。このことは、講義と臨床実践との隔たりを改善する教授方法を検討していく上で意義のある結果であると言える。

VI 今後の課題

今後の課題としては次の2点があげられる。

- ① 今回の調査では対象が15名と少数での分析であった。今後はさらに人数を増やして内容を更に吟味し、結果の信頼性を高める。
- ② 教育目標における具体的な評価規準を作成し、学生の学習到達度を確認することにより学習プログラムの課題を分析する。

「国体」観念の史的変遷について

— その展開と影響 —

荒 木 利 宏

目 次

問題の所在

第一章 「成立」— 後期水戸学 —

第一節 水戸学理解の変遷

第二節 水戸学における「国体」

第二章 「展開」— 明治期における「国体」理解 —

第一節 「啓蒙」と「国体」

第二節 法思想における「国体」

第三章 「再編」— 時代状況との「相克」 —

第一節 井上哲次郎不敬事件

まとめにかえて

本論文は、近代日本において大きな影響力をもった「国体」観念について、その意味内容にどのような変遷がみられたのか、またそれぞれの時期において「国体」にどのような役割が期待されていたのか、を検討しようとするものである。周知の如く、この「国体」という言葉は、昭和十年代に「国体明徴」のスローガンのもとに盛んに用いられるようになって以降、「国体護持」に固執しながら敗戦を迎える昭和二十年に至るまで、思想界のみならずあらゆる分野

において「猛威」を振った。しかし、ことさらに「国体」の「明徴」が提唱されたことに象徴されるように、その意味するところをめぐっては誰もが納得し、理解しうるような明確な解釈は、当時の政府首脳の間においても成立することではなく、常に曖昧な、いかようにでも解釈のできる言葉として、後には頻繁に多用・乱発されるに至った。明確な概念規定を欠いている「国体」という言葉は、またそれ故に様々な解釈を乱立させる余地を残すこととなり、結果的にその意味するところの範囲が、解釈者の意図によって拡大したり縮小したりする事態を招くことになっていくのである。

こうした点を踏まえた上で、本論文では「国体」という対象を検討する上での便宜的指標として「成立」、「展開」、「再編」の三つの時期区分を設定し、考察を進めた。第一章では「国体」観念の浮上に大きな役割を果たした水戸学を対象として取り上げ、会沢正志斎の『新論』に典型的に示される「祭祀」による「人心統合」の論理を検討し、「天祖」を主軸に据えたその独自の「国体論」のありようを検討した。結論的にいえば、会沢の論理においてこの「天祖」という存在は、その影響力を無限に拡大させることにおいて、「現在」の時点における「君臣」の関係を絡め取り、「将来」においてもその関係の持続を保障する機能を有する存在として認識されていたということができであろう。この論理は、明治以降における「天皇」―「臣民」の関係においても頻繁に用いられるに至るのである。

第二章では、その対象を明治期全般に広げて考察を行った。第一節では、明治初期における代表的「啓蒙」思想家、福沢諭吉と加藤弘之の「国体」理解を取り上げ、西欧の諸思想を背景として既成の「国体」理解を批判し、そこに新たな意味内容を付与していく彼等の主張のありようを検討した。福沢・加藤は西欧の諸思想を軸とし、「開化」―「未開」の二項対立的価値意識に基づいて、既成の「国体論」をその議論の俎上にのせた。しかし、それらの言説は「開化」の必要性―「未開」要素の排除―に促されての発言であり、「国体論」の本質的批判にまでその論が及ぶことはなかった。こうした状況を前提として、「祖先崇拜」を軸とする「国体論」がふたたび浮上してくる。第二節においては、穂積八束の「国体論」を主に取り上げた。穂積は「国体」という語を主権の所在を示すものとして法学の分野にも持ち込むことによって「国体」解釈の幅を拡大し、また君主主権説を提唱して天皇機関説を徹底して排撃して、のちの天皇機関論争勃発の前提を準備するなど、「国体論」のその後の推移に大きな影響を与えた。また、教育の分野においても国民道徳論の有力なイデオログの一人として活躍し、教育界にもその影響力を及ぼしている。本論文では、この法学・教育界における穂積の主張をそれぞれ検討し、北一輝・木下尚江らの穂積批判にも言及した上で、当時においては「少数説」に過ぎなかった穂積の主張が、のちに大きな影響力を振るうに至ったということの持つ意味を考察した。

第三章では、井上哲次郎・里見岸雄の「国体論」を取り上げて考察を行った。明治から大正へという時代の変化は、「国体」イデオログ達にその論理の「再編」を促す一つの契機となった。その要因としては、さしあたり二つの点を指摘することができる。一つには、大正天皇という天皇の存在、もう一つは、民本主義・マルクス主義の勃興である。大正天皇は、父明治天皇が示したような「存在感」を発揮することの出来ない病弱な君主であり、「国体」イデオログたちにとってはその存在でもって天皇の「カリスマ性」を鼓吹することができない以上、従来のありようを修正していく必要に迫られることになったのである。また民本主義・マルクス主義などの新たな思潮が流入してくる中で、旧態依然の「国体論」では抗し得ないという危機感も次第に広まりをみせるようになった。こうした背景を踏まえ、井上と里見は時代状況により、「即した」形での新たな「国体論」の構築を模索し、結果としてそのことが既成の「国体論者」との「摩擦」を引き起こすことになったのである。しかし、かれらの「国体論」もいわば時代と直接する部分のみの「修正」とどまり、その本質的部分は手つかずのままに温存されることになったのである。

以上の考察から、「国体」とは常に体制の側、権力の側に寄りそう形でその思想的影響力を発揮し、自らとは異なった思想をも次々と「併呑」することにおいてその思想的延命をはかってきたということを確認することができた。ただ本論文では、「国体」がその力

を最大限に発揮していく昭和十年前後以降の具体的動向まではフォローすることができなかったので、この時期における「国体」をめぐる状況の究明と、本論文で扱った様々な対象を更に掘り下げて検討していくということが、残された重要な課題となる。